

広田義治編著

## 『日鋼労働者と主婦の青春』

1954年日鋼室蘭闘争の記録』

評者：鎌田 とし子

この度、北辺の地室蘭において熾烈に闘われた「日鋼室蘭争議」の全貌が明らかにされた。B5版1,276頁に及ぶ全記録が生資料集の形で刊行されたからである。

この労働争議は参加人員の規模において、また長期にわたるストライキで闘った点でも、戦後日本労働運動史に残る大争議であったにもかかわらず、1冊の本として出版されなかったからか存在の割には人々の記憶から遠ざけられてきたように思う。評者はある縁からこの争議の重大さに気づき、二年間集中的な調査を行ったが、追いかければ追いかけるほど、労働運動の原点がここにあると認識せざるを得なくなった。すなわち、普通の労働者たちが同じ境遇で働く仲間の解雇を見殺しにできなかったこと、対抗のために職場はもとより家族ぐるみ・地域ぐるみ闘争を組織し、地域の鉄鋼産業・石炭産業、のちには全国に広がる共闘支援をえて、まさに死闘を繰り広げるにいたった労働者の憤りと連帯を目の当たりにするからである。

1

争議の舞台となった日本製鋼所室蘭製作所は、三井財閥系の軍需工場として、第二次世界大戦中は戦艦大和の巨砲を制作するという大型構造物メーカーとして名を馳せていた。したが

って隣接の新日鐵（前身は富士鉄）の製鉄所とは異なり、腕に自信をもつ熟練工を多く抱えるという特徴を持っていた。

1954（昭和29）年、朝鮮戦争の米軍特需ですでに息を吹き返していた日本製鋼所は、休戦による特需の消失とデフレの中で軍需産業復活の夢をうち砕かれ、室蘭製作所3,742人のうち915人に解雇通達を出すという暴挙に出た。敗戦後生産を再開するまでには、加工燃料の石炭掘りにまで出かけ、隣接の富士鉄よりも低い賃金に耐えてきた労働者たちは、この4人に1人という大量の指名解雇に「親とも慕う会社」に裏切られた思いで不満を爆発させた。労働組合は解雇通知を配達前に自宅前で回収し、解雇該当者も非該当者も一丸となってストライキで闘うことを決議し、6月から12月末までの約200日間に及ぶストライキに突入したのであった。

しかし9月23日、下級職制が先頭に立って1,000名の署名を集め、組合を分裂させ第二組合を結成する。それ以後の苦闘は組織防衛と生活費の調達に多大の精力を費やさざるを得なくなるが、この間組合を通じて融資した団体、共闘組織、全国に派遣したオルグに対する激励とカンパは膨大な規模に達した。また目立たないが、組合の「闘争ニュース」を札幌の機関紙印刷所の労働者が時間外労働をかって出て印刷すると、国鉄労働者が室蘭まで自発的に運搬するという連携プレーが行われていたことに驚かされる。当時の労働者たちはこれだけの連帯意識と組織力を持っていたのである。

第二組合さえ分裂しなければ勝てたはずの争議であるが、中央労働委員会の斡旋案を受諾して年の瀬も押し詰まった12月26日「涙の全員大会」を開き、発生效后193日目に終結を決定したのであった。当初の解雇通告者915名からみれば253名の減であるが、希望退職者も出ているので結局は122名の解雇取り消しに終わった。

著者の広田義治氏は、当時組合執行部にいた弱冠28歳の教宣部長であった。本の題名になった『労働者と主婦の青春』とは、「損得抜きで他人のためにつく」して闘った男たちと、共に闘った主婦たちへの賛歌なのである。日雇いの息子として生まれ、兵役後旋盤工として日鋼の本工に採用される。向学心旺盛な本の虫は、いずれの日にかと進学の夢を持ち社内定時制高校に入学するが、卒業するとまもなく執行委員に選出され、大争議を闘うことになった。解雇された後も室蘭にとどまり町工場で日雇いの機械・仕上げ・鉄工として転々とした。彼にとっての青春でもあった日鋼室蘭闘争の記録は、この苦しい日雇い生活のなかでライフワークとして書かれたのである。

他方私たち夫婦は、室蘭をフィールドとして「工業都市の階級構造」の調査を30余年にわたって継続してきた。戸別訪問した先で当時の資料を捨てきれずに押入や車庫の隅に抱え込んでいた労働者に会い、話を聞くうちにこの大争議を記録し残すことを使命と考えるにいたるが、二年間を費やして資料の収集に当たったものの、主要な資料の多くはすでに散逸しており、残念ながら当時の主だった関係者の証言をテープから起こして『日鋼室蘭争議三〇年後の証言』（鎌田哲宏・とし子著、御茶の水書房、1993年）という形で出版せざるを得なかった。この本の特徴としては、争議の過程での「階級意識の形成と組合分裂」に焦点を合わせてあるため、下級職制による第二組合結成にいたる首謀者たちの生々しい証言を収録できたこと、職場復帰後の第一・第二組合員の確執、地域での選挙戦で第一組合が会社推薦候補者と同数以上の票を得て善戦したことなど、合わせて読んでいただくと理解が深まると思う。

実は資料収集に取りかかっていたときに、広

田氏ともう一人争議後も10年間第一組合の旗を守り、最後の書記長をつとめた人の許に資料が存在するを知っていた。しかし当事者であった労働者が書き残すのが本筋だと考えた私たちは、その二人に公刊の日が来ることを期待して、敢えて強く迫ることを控えた経緯がある。時折り広田氏の家をたずねると、狭い市営住宅の隅にパソコンが据えられていて、一まわり小さくなった背中をまるめてこつこつ作業しているではないか。果たして完成するのか案じながら待っていた甲斐があって、この度その膨大な資料が日の目を見ることになった。聞けば夫人も共通の目標に生き、こつこつ貯めた500万円を積んで自費出版したと言うではないか。これは広田夫妻の生涯を懸けた労働者としての誇りと意地と闘いの金字塔であると思った。解雇されてもこの地で堂々と胸を張って「このように生きてきたのだ」という証し、彼自身の階級闘争がこの書なのである。

## 3

というわけで、本書は現在目にすることが出来る争議資料のすべてが収められている。この手の書物が陥り易い勇ましい檄や組合用語を押さえて、ひたすら生の資料に忠実に、記録に徹した書風に好感がもてる。当時闘争の中核にいた人だけに、「闘争ニュース」、教宣部の夥しいビラ、「執行委員会ノート」「共闘情報」「組合大会議事録」は言うに及ばず、解雇通達から中労委斡旋案、総評高野の動き、共闘組織である富士鉄・炭労・全道労協、室蘭地区労・室蘭主婦協の動きなど、もはや手に入らない貴重な記録ばかりである。さらに組合員の日記、会社守衛の日記、「地元新聞報道記事」「赤旗記事」、全国に派遣したオルグの報告・カンパの額から、当時歌われた闘争歌の作曲者紹介・裏話などが時系列的にすべて紹介・収録されているばかりか、会社幹部と組合幹部とのスケジュール

闘争の裏約束があったものの、一般組合員と主婦の闘争意欲の思わぬ盛り上がりにつけられなくなって、両者の間に挟まれて苦惱し「行方不明」になる組合幹部まで出る始末。組合長自身が会社の説得と労働者の意気の間で揺れに揺れながら、結局は終結まで持ちこたえた危うさも見せる。もはや誰にもコントロール不可能な労働者の怒り、これこそ闘いの中から育った階級意識であろうと納得させられる。

さてこの資料集の読み方にはいろいろある。史実自体小説より奇なりで、経緯を辿るだけでも様々な人物の言動に興味を惹かれるであろう。たとえば闘争のエポックをあらかじめ決めて、ストライキ突入時の組合大会、分裂時、終結時に焦点を定めて掘り下げる、または第二組合結成に至る会社幹部の分裂工作、分裂に加担した労働者の属性とその論理、第二組合へと抜けていく組合員の心性、逆に最後までとどまった組合員の論理とはなにか、総評高野の家族ぐるみ・地域ぐるみ闘争の実態はどうだったのか、共産党の組織はレッドパージで根こそぎにされた後果たして残存していたのか、どのような活動をしたのか等々、問題設定は人によってまちまちであろう。史実に忠実な資料集は、読む人の問題設定によっていくつかの回答を与えてくれる筈であり、興味は尽きない。

しかし真面目で生産現場で役に立つ労働者たちを、本気で怒らせたら手がつけられなくなるという破壊力、連帯の輪が広がれば、同業・産業の枠を越えて全国の労働者や農民までも結束させてしまうという組織力、労働者のアキレス腱である解雇と生活不安に火がつけば操作不可能なエネルギーを暴発させてしまう恐怖、この教訓はこの争議を境に三井のみならず経営側共通の認識となり、以降はもっとスマートで老獪な労務管理手法が工夫されていったのである（現状を見よ）。

日鋼室蘭の場合は争議終結後10年にわたり第一組合が存続し、切り崩しにも応えず組織を守った。争議後神武景気でたちまち人手不足に陥った会社側は臨時工の本採用に踏み切り、第二組合が一方的に組織を増やしていく。他方第一組合は定年退職による自然減がすみ、新入社員は加入できない制度のもとで減少の一途を辿った。それでも1964年9月の統一時点においてさえ、第二組合2,860人に対して第一組合はまだ380人を擁していた。それだけではない。闘争時の苦い経験から、会社購買部から自分たちの生活協同組合を独立させ、「市民生協」として一般に公開したので、第二組合員の夫に隠れた陰の応援者となった妻たちと市民、隠れキリシタンとなった新労＝第二組合員がここを拠点として、第一組合の推す市議会議員を第二組合と同数当選させ、得票数は常に上回るという逆転現象を見せた。闘争の中で培われた労働者の階級意識は簡単に消失するような柔なものではなかったことを実証している。

ここに使われた資料はすべて氏によって道立労働資料センターに寄贈された。

なおこの本の残部は少なくなったそうであるが、広田氏の許に出版費が回収される一助になればとの老婆心から、自宅住所とFAX/TELを挙げておく。公立図書館でも広田氏の領収書で可能だそうである。

〒050-0083 室蘭市東町5-4-1-101 広田義治  
(T/F 0143-46-1912)

(広田義治編著『日鋼労働者と主婦の青春 1954年日鋼室蘭闘争の記録』上下2巻, 2001年3月, 光陽出版社, B5版各viii + 598 + x頁, v + 674頁, 定価各6,000円)

(かまだ・としこ 東京女子大学名誉教授)